

新約聖書概観 3

一般書簡・黙示録

日本聖書学院

一般書簡

一般書簡緒論

I. 一般書簡とは

一般書簡は、パウロ以外の著者によって記された手紙です。これらの書は、それぞれの著者の独特の視点を通してクリスチャンが知らなければならない大切な真理を書き留めています。著者は以下の5人です。

- ヤコブ -- 主の兄弟・初代エルサレム教会の長老
- ペテロ -- 使徒
- ヨハネ -- 使徒
- ユダ -- 主の兄弟
- ヘブル人への手紙の著者 -- 詳細不明

II. 一般書簡の特色

ヤコブ書を除くすべての手紙はパウロが殉教した後に書かれたものと考えられています。この時期はパウロが予見していたように偽りの教えが教会に蔓延し、大きな混乱を引き起こしていました。それゆえ一般書簡はこうした危険な教えとその教えを持ち込む偽教師たちに対する警告と非難が多く記されています。同時に教会は対外的な迫害の危険にもさらされていました。こうした背景の中で、これらの書は信徒たちを戒め、励まし、教えることを通して、主に喜ばれる歩みを生み出していくように促しています。

III. 一般書簡の概略

一般書簡には以下の書が含まれています。

書簡	著者	執筆年代	読者
ヘブル人への手紙	不明	A.D. 64-68	ローマ居住の信徒 (主にユダヤ人)
ヤコブの手紙	主の兄弟ヤコブ	A.D. 44-49	離散したユダヤ人信徒
ペテロ第一の手紙	使徒ペテロ	A.D. 64-65	小アジアの教会
ペテロ第二の手紙	使徒ペテロ	A.D. 65-67	小アジアの教会
ヨハネ第一の手紙	使徒ヨハネ	A.D. 90-95	エペソ周辺の教会
ヨハネ第二の手紙	使徒ヨハネ	A.D. 90-95	エペソ周辺の教会
ヨハネ第三の手紙	使徒ヨハネ	A.D. 90-95	ガイオ
ユダの手紙	主の兄弟ユダ	A.D. 64-69	不明 (ユダヤ人信徒)

ヘブル人への手紙

大祭司であるキリスト

I. 緒論

A. タイトル

新約聖書の各書が正式に一つの本として集められ始めた紀元100年頃、利便性を向上するために各書のタイトルが付けられました。この書のタイトルは伝統的なギリシャ語のタイトルで、二世紀にはすでにこのような名で呼ばれていたことが知られています。

B. 著者

この手紙の著者が誰であるのかということは、ヘブル人の手紙の最大の疑問点であると言えるでしょう。この手紙はほかの書簡とは違い誰が著者であるのかを明確に記していません。冒頭の挨拶文だけでなく、この手紙の内容からも著者の正体を見ることができないのです。しかし手紙の内容は、私たちに一つのことを明確にしてくれます。それは、読者が著者のことをよく知っていたということです。それ故に、誰が書いたのかを特筆する必要がなかったと判断することができます。

確かに手紙自体には著者の名前が記されていませんが、キリスト教の歴史の中で、いくつかの名前がこの手紙の著者として挙げられてきました。

1. 伝統的見解

- a. アレキサンドリア地方の伝統的見解 — パウロが著者である
- b. 北アフリカ地方の伝統的見解 — バルナバが著者である
- c. イタリアと西ヨーロッパの伝統的見解 — パウロの著者性の否定

2. その後の歴史

基本的にパウロの著者性は紀元5世紀教会の中で受け入れられてきました。しかし、16世紀の宗教改革時にもう一度この手紙の著者が誰であるのかということが問題となりました。エラスムスは言語学上の理由でパウロの著者性を否定し、ルターはアポロが著者であると主張し、カルヴィンは使徒の権威を手紙の中に認めながらも、パウロの著者性を否定しました。

ローマカトリック教会はトレントでの会議において教会として、この手紙がパウロによって書かれたものであるという立場を再確認しましたが、現代のキリスト教学者は、基本的にパウロが著者であるという立場を否定しています。

3. パウロの著者性に関して

a. パウロが著者であるという根拠

- (1) 著者は執筆時に投獄されているようだ (10:34)
- (2) ほかのパウロ書簡との教理的類似性
- (3) テモテとの関係 (13:23)
- (4) 手紙の締めくくり方がパウロの手法に類似している

b. パウロが著者ではないという根拠

- (1) 著者の名前が記されていない
- (2) 著者は福音の知識を他の人から聞いたと記している (2:3)
- (3) 著者はヘブル語を知らない
- (4) スタイルと単語がパウロのものではない
- (5) 中心的主題であるキリストの大祭司としての役割はパウロの書簡に登場しない
- (6) テモテの解放に関する記事はパウロの死後と考える方がふさわしい
- (7) パウロはテモテを「私たちの兄弟」とは呼ばず、「私の子」と呼んでいる

c. 結論

パウロが著者であるという客観的な根拠は見つからないと言うのが実情です。事実内的証拠はパウロが著者ではないという方に傾倒しています。確かに教父時代にはパウロの著者性が認められていましたが、パウロが著者である可能性は限りなく低いと考えることができるでしょう。

2. 著者としてあげられる人物

- a. ルカ
- b. バルナバ
- c. アポロ
- d. ローマのクレメント
- e. マルコ
- f. プリスキラ

C. 聖典性

ヘブル人への手紙は、聖典性の疑われた書簡の一つです。しかし、この事実はこの手紙の靈感への懐疑心から生まれたものではなく、著者に関する問題点からもたらされたものです。西方教会は、著者が使徒でなければ聖典であるべきではないと主張し、東方教会は、使徒の権威がそこに見いだされれば、聖典に含むべきであると主張しました。

D. 読者

1. 宛先場所に関して

2. ヘブル人という表現に関して

3. 読者と著者の関係に関して

E. 執筆年代

この手紙の執筆年代を次の3つの事柄から割り出すことができます。これらを考慮するとき執筆年代は紀元67-69年の間であると考えられます。

1. この手紙は主に第二世代のクリスチャンに対して書かれたものである (2:1-4)

2. テモテの存命中に書かれたものである (13:23)

3. 神殿崩壊の前に書かれたものである

F. 背景と目的

この手紙が書かれた時、読者たちは一つの迫害を乗り越えた状況にありました (10:32-34)。継続的に続くであろう様々な迫害と困難の中で彼らは教会に集まることを怠るようになり (10:25)、靈的に鈍く未熟になり (5:11-14)、押し流されてしまうような状況に陥っていました。そんな状態にあった読者に対して、著者はキリストの卓越性と十全性を教え、数々の警告と勧めを通して彼らを励まそうとしていたのです。

G. 特徴

1. 言語とスタイル
2. 旧約の引用
3. キリストの祭司職と現在の働きに関する教え

5. 警告

- a. 2:1-4
- b. 3:7-19
- c. 5:11-6:20
- d. 10:26-31
- e. 12:14-17
- f. 12:18-29

6. 励ましと勧め

- a. 4:1
- b. 4:11
- c. 4:14-16
- d. 6:1
- e. 10:22-24
- f. 12:1
- g. 12:28
- h. 13:13-15

II. 内容

I. キリストのよりすぐれた立場 1:1-4:13

A. キリストは預言者よりも優れた方である 1:1-3

B. キリストは天使よりも優れた方である 1:4-2:18

1. より偉大なメッセンジャー 1:4-14

- a. キリストは天使に礼拝されるべき御子である 1:4-6
- b. キリストは天使とは違い永遠に存在する方である 1:7-8

c. キリストは天使とは違い永遠に治める方である 1:9-14

2. より偉大なメッセージ 2:1-18

a. よりすぐれた救い（警告1） 2:1-4

b. よりすぐれた救い主 2:5-18

(1) 受肉された救い主 2:5-9

(2) 贖いを達成された救い主 2:10-18

C. キリストはモーセよりも優れた方である 3:1-19

1. 治める者と仕える者の違い 3:1-6

2. 神の家における安息に関する警告（警告2） 3:7-19

D. キリストはヨシュアが与えた安息よりも優れた方である 4:1-13

1. 安息に入らないことに対する訓戒 4:1

2. キリストの与える安息 4:2-10

3. 安息に入ることに對する勧め 4:11-13

II. キリストのよりすぐれた働き 4:14-10:18

A. キリストのより優れた祭司職 4:14-7:28

1. 大祭司であるキリスト 4:14-5:10

a. 大祭司としての偉大な立場 4:14-16

b. 大祭司にふさわしい偉大な条件 5:1-10

(1) 人から選ばれた者 5:1-3

(2) メルキゼデクの位に等しい大祭司 5:4-10

2. 完全なる献身をもってキリストに従うことへの勧め（警告3） 5:11-6:20

- a. 霊的怠惰に対する警告 5:11-14
- b. 霊的墮落に対する警告 6:1-8
- c. 確信を持つことに対する勧め 6:9-20

3. 大祭司としてより偉大な根拠 7:1-28

- a. メルキゼデクはアブラハムより優れている 7:1-8
- b. メルキゼデクの祭司職はレビ人の祭司職よりも優れている 7:9-17
- c. キリストの祭司職は神のことばと神の誓いによって確立された 7:18-22
- d. レビ人の祭司職は死によって終了するが、キリストは永遠に生きておられる 7:23-25
- e. レビ人の祭司職は罪人が担うが、キリストは罪のない大祭司である 7:26-28

B. キリストのよりすぐれた契約 8:1-8:13

1. より素晴らしい契約 8:1-6
2. 新しい契約 8:7-13

C. キリストのよりすぐれた聖所といけにえ 9:1-10:18

1. 古い契約の聖所といけにえ 9:1-10
 - a. 古い契約の聖所 9:1-5

b. 古い契約のいけにえ 9:6-10

2. 新しい契約の聖所といけにえ 9:11-10:18

a. 新しい契約の聖所 9:11

b. 新しい契約のいけにえ 9:12-10:18

III. キリスト者のよりすぐれた信仰の歩み 10:19-13:25

A. キリストにあるよりすぐれた特権 10:19-12:29

1. 救いにいたる信仰 10:19-25

2. 偽りの信仰（警告4） 10:19-39

3. 本物の信仰 11:1-3

4. 信仰の模範 11:4-40

a. アベル 11:4

b. エノク 11:5-6

c. ノア 11:7

d. アブラハムとサラ 11:8-19

- j. イサク 11:20
- k. ヤコブ 11:21
- l. ヨセフ 11:22
- m. モーセの両親 11:23
- n. モーセ 11:24-29
- o. ヨシュアとラハブ 11:30-31
- p. その他の信仰者たち 11:32-40

5. 堅く立つ信仰 12:1-29

- a. キリストの模範 12:1-4

- b. 神の懲らしめと矯正 12:5-13

- c. 聖さの必要性（警告5） 12:14-17

- d. 神を拒むことへの警告（警告6） 12:18-29

B. キリストにあるよりすぐれた生涯 13:1-21

- 1. 他の人に対して 13:1-3

- 2. 自分たちに対して 13:4-9

- 3. 神に対して 13:10-21

IV. 結びの挨拶 13:22-25

ヤコブの手紙

新約聖書の箴言

I. 緒論

A. タイトル

ほかの一般書観と同様に、ヤコブの手紙は著者であるヤコブの名前がタイトルに付けられています。

B. 著者

1. 新約聖書に登場するヤコブ

a. イスカリオテでないユダの父 (ルカ6:16)

b. アルパヨの子ヤコブ (マタイ10:3)

c. ゼベダイの子ヤコブ

d. 主の兄弟ヤコブ

(1) 言葉の類似

この手紙の文体や表現、使われている単語などが使徒15章に登場するヤコブの発言に類似している

(2) 内容

この手紙に記されている言葉や内容がイエスが語った事柄に非常に近い

(3) 伝承との一致

この手紙の内容は、キリスト教会に残されている伝承にある主の兄弟ヤコブの姿と類似している

ヤコブという人物は、イエスが復活する前は兄が救い主であることを信じていませんでした (参照: ヨハネ7:5)。しかしキリストは復活後、特別にヤコブの前に現れ (1コリント15:7)、その時信仰を持ったであろう彼は、弟子たちと行動を共にするようになりました。彼は単なる一弟子ではなく、初代エルサレム教会のリーダーとして活躍した人物でした。これは、ペテロが神の働きによって牢獄から解放されたとき、ヤコブに報告するように弟子たちに伝えたことや (使徒12:17)、エルサレム会議においてヤコブが最終的な結論を

示したこと（使徒15:13ff）によっても伺い知ることができます。パウロもヤコブがエルサレム教会の中心的なリーダーの一人であることを告げています（ガラテヤ1:19；使徒21:18）。こうしたことから、ヤコブが人々からの尊敬を受けていた初代教会の中心的人物であること（ガラテヤ2:9）を聖書から見て取ることができます。

C. 読者

この手紙は「国外に散っている12の部族へ」という宛先が着いています。しかし、ヤコブがこの手紙を書いた1世紀にはすでに部族の区分というものは失われていたと言っても過言ではありませんでした。紀元前722年に北の王国が崩壊して以降、捕囚などの影響で部族としての概念が非常に曖昧になってしまったのです。ですからヤコブが考えていたのは特定の部族たちのことではなく、新約聖書のほかの箇所が示すように、イスラエルの民全体を表す言葉と捉えるべきでしょう。つまり、ヤコブはユダヤ人であるクリスチャンたちに対してこの手紙を書いたのです。

このユダヤ人たちは、「国外に散っている」者たちでした。これはイスラエル以外に住むユダヤ人たちに対する一般的な呼称として用いられていた表現です。特にこの手紙は初代教会初期に起こった迫害によって散らされていったユダヤ人クリスチャンを対象に書かれたものであると考えられます。

D. 執筆年代と執筆場所

この手紙は新約聖書の中で最初に書かれたものであるとほとんどの学者たちが考えています。事実この手紙は、エルサレム会議の前に書かれていることが伺えますし、教会にまだ異邦人がいない（または少ない）時に書かれた手紙であることが伺えます。彼らがほかの教会とは違いユダヤ人の会堂で集会をしていることや異邦人の信徒との関係に関する記事が全く欠如していることなどから、パウロたちの宣教旅行によって多くの異邦人たちが信仰を持つ前の手紙であることを理解することができます。これらのことから、一般的に紀元44-49年頃にこの手紙が書かれたと考えられています。新約聖書はヤコブがエルサレムを拠点として働きをしていたことを教えていますし、伝承では彼が死ぬまでエルサレムで働きを続けていたと言われています。ですから、この手紙はエルサレムから書かれたと考えることができます。

E. 背景と目的

この手紙が書かれた時、読者たちは試練を経験していました。そしてその中であって読者たちはクリスチャンとしてふさわしい行動をとっていませんでした。そこでヤコブはこの手紙を用いて、彼らに試練の理由と目的を教え、特定の罪に対する警告を与え、過ちを犯した者たちに悔い改めを勧めました。

ヤコブは真の信仰の特徴を明記し、その特徴を自らの生涯と照らし合わせることによって読者たちのキリストとの関係を吟味するように促しています。この書は神学的な書ではなく、むしろ非常に実践的な書です。

F. 特徴

1. キリストの名前が2回しか登場しない
2. キリストと救いに関する教理が教えられていない
3. 権威
4. 旧約の影響
5. 山上の説教の影響

II. 内容

I. 挨拶 1:1

II. 信仰のテスト 1:2-18

A. 信徒の試練 1:2-12

1. 試練に対する正しい態度 1:2-4
2. 試練における祈り 1:5-8
 - a. 知恵の必要 1:5a
 - b. 知恵の要請 1:5b
 - c. 知恵の授与 1:6-8
3. 試練を受けた者の取るべきふさわしい態度 1:9-11
 - a. 貧しい者の態度 1:9
 - b. 富んでいる者の態度 1:10-11
4. 試練を耐え抜いた結果 1:12

B. 誘惑の本質 1:13-15

1. 誘惑の根源 1:13-14
2. 誘惑の結果 1:15

C. 人に対する神の働き 1:16-18

1. だまされることに関する警告 1:16
2. 良い賜物を与える神 1:17
3. 新しいいのちを与える神 1:18

III. 生ける信仰のしるし 1:19-3:18**A. 信仰はみことばに対する応答によって示される 1:19-27**

1. みことばに対する反応 1:19-20
2. みことばの受容 1:21
3. みことばへの従順 1:22-27
 - a. 積極的従順の要求 1:22-25
 - b. 受け入れられる従順の本質 1:26-27

B. 信仰はえこひいきに対する応答によって示される 2:1-13

1. えこひいきに対する非難 2:1-4
2. えこひいきの結果 2:5-11
 - a. 行動の矛盾 2:5-7
 - b. 律法の違反 2:8-11
3. 一貫した行動の推奨 2:12-13

- D. 信仰は行い有無によって示される 2:14-26
 - 1. 役に立たない信仰の特徴 2:14-20
 - a. 働かない信仰の無益 2:14-17
 - b. 行いのない正当な信仰の不毛 2:18-20
 - 2. 行いによる救いにいたる信仰の明示 2:21-25
 - a. アブラハムの信仰 2:21-24
 - b. ラハブの信仰 2:25
 - 3. 信仰と行いの共存 2:26

- E. 信仰は自制の有無によって示される 3:1-12
 - 1. 舌を制御することの重要性 3:1-2
 - 2. 舌を制御することの必要性 3:3-6
 - a. 制御された舌のもたらす効果 3:3-4
 - b. 制御されない舌のもたらす損害 3:5-6
 - 3. 制御不能な舌の性質 3:7-8
 - 4. 舌の矛盾 3:9-12

- F. 信仰は知恵の有無によって示される 3:13-18
 - 1. 知恵を示すことの勧め 3:13
 - 2. 自制の欠如に見る偽りの知恵 3:14-16
 - 3. 自制によって示される本物の知恵 3:17-18

V. 世的な事に対する真の信仰の反応 4:1-5:12**A. 利己的な争いに対する真の信仰の反応 4:1-12**

1. 世的であることをあらわにする状態 4:1-6
 - a. 状態の説明 4:1-3
 - b. 状態への非難 4:4-6
2. 世的な者に対する訓戒 4:7-12
 - a. 神に近づくことの勧め 4:7-10
 - b. 批判的であることに対する戒め 4:11-12

B. 厚顔な計画に対する真の信仰の反応 4:13-17

1. 自己十全な態度に対する非難 4:13-14
2. 正しい態度の提示 4:15
3. 持っている態度に対する断罪 4:16-17

C. 社会的不正に対する真の信仰の反応 5:1-11

1. 暴虐的な金持ちに対するやがて来る裁き 5:1-6
 - a. 裁きの宣告 5:1
 - b. 裁きの説明 5:2-3
 - c. 裁きの内容 5:4-6
2. 虐げられている信徒に対する励まし 5:7-11
 - a. 再臨に基づく忍耐への召し 5:7-8
 - b. 非難し合うことへの警告 5:9
 - c. 苦しみと忍耐の模範 5:10-11

D. 利己的な誓約に対する真の信仰の反応 5:12

VII. 生ける信仰が持つ神に対する依存 5:13-20

- A. あらゆる状況に置ける神への依存 5:13
- B. 病における神への依存 5:14-16a
- C. 神に依存する者の力 5:16b-18
- D. 迷い出たものに関する神への依存 5:19-20

ペテロの手紙第一

生ける希望の手紙

I. 緒論

A. タイトル

ほかの一般書観と同様に、この手紙は著者であるペテロの名前がタイトルに付けられています。ペテロの綴った別の手紙が次に続くので、第一の手紙という説明が加えられています。

B. 著者

聖書も伝統もペテロがこの手紙の著者であることを教えています。しかし近年の学者たちはペテロがこの書を記したことを否定するようになってきました。その根拠はペテロが教育を受けていない者だったので（使徒4:13）ギリシャ語で手紙を書くことができなかったということです。けれども使徒4:13は、ペテロがユダヤ教の訓練を受けた者でないことを教えているのであって、彼がギリシャ語を書くことができないことを教えているのではないのです。また5:12ではシルワノによってこの手紙を書き送っていることが記されています。これはペテロの言葉をシルワノが書き留めたことを示唆していますが、高度なギリシャ語力は筆記者であったシルワノによるところが大きかったと考えることもできるでしょう。

C. 読者

「寄留している、選ばれた人々」に対して書かれたこの手紙は、特に「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤ」に散った人たちに宛てられています。これらの土地は現代のトルコに所在していました。読者には、ユダヤ人と異邦人の両方が含まれていたと考えられています。確かに「散って寄留している」と訳されている言葉がヤコブ書で見た「国外に散っている」というユダヤ人を表す言葉と同じものであることや、多くの旧約聖書からの直接的引用や適用、そしてペテロがユダヤ人の使徒であったことから、この手紙がユダヤ人に向けて書かれていると考えることも可能です。しかしこの手紙で描かれる読者たちの姿は彼らが異邦人であったことを強く示しています。

D. 執筆年代と執筆場所

ペテロは紀元68年に殉教したと言われています。それ故にこの年以降にこの手紙が書かれていることはありません。またネロの迫害期（紀元64年中頃以降）にこの手紙が書かれたことも考えにくいでしょう。なぜならば、ペテロが記す迫害は、殉教をもたらすものではなかったからです。ですから考えられる執筆年代は、ネロによる迫害の起こる直前（紀元64年前半）であると考えられます。

ペテロはこの手紙の終わりに「バビロン」という言葉を使います。ここが執筆場所であると考えられますが、問題はこのバビロンがどこを指しているのかということです。3つの可能性があげられています。

1. ナイル川沿いにあるバビロン

- a. ローマの砦のある町で、教会にとって重要なばしょではなかった
- b. ペテロがここに滞在した証拠が全くない
- c. マルコとシルノワがペテロと共にこのような辺境の地にいることは考えにくい

2. ユーフラテス川沿いにあるバビロン

- a. 名前の本来の意味はこの町のことである
- b. 比喩的でない箇所で使われるとき、この町を指している
- c. バビロンは散らされていたユダヤ人の中心的な町であり、多くのユダヤ人が居住していた
- d. しかし、ペテロとバビロンを結ぶ伝承は全くない
- e. バビロンに教会があった証拠もない
- f. パウロの助け手でもあったマルコとシルノワがこの時期にこれほどの東方にいることは考えにくい

3. ローマ

- a. 古い伝統ではパピアスがこの見解を持っていて、教会はこの見解を受け入れてきた
- b. マルコとシルノワが一緒にいることが説明できる
- c. ペテロとパウロの死に関する年代に適合する
- d. 黙示録でこのような使われ方をしていると考えられる箇所がある

E. 背景と目的

この手紙は、迫害を受け始めたクリスチャンたちに対して、忍耐と希望を持ち続けるようにという励ましを与えるために書かれました。やがて来るであろうさらに激しい迫害をも希望のうちに忍耐をもって乗り切ることができるように、ペテロは励ましを与えています。

III. 内容

I. 挨拶 1:1-2

II. 救いによってもたらされる感謝 1:3-12

A. 救いの解説 1:3-5

1. 救いの創始者
2. 救いの性質
3. 救いの確実性

B. 試練と喜びに見る救いの証明 1:6-9

C. 救いの伝達 1:10-12

1. 預言者たちの探求 1:10-12a
2. 聖徒たちによる宣教 1:12b
3. 天使の願望 1:12c

III. 救いによってもたらされる特徴 1:13-2:3

A. 救いから生まれてくる生涯 1:13-2:3

1. 神に関して 1:13-21
 - a. 揺るがない希望 1:13
 - b. 絶対的な聖さ 1:14-16
 - c. 正しい畏怖の念 1:17-21
2. 兄弟姉妹に関して見ることができる生き方 1:22-25
3. 個人の成長に関して見ることができる生き方 2:1-3
 - a. 成長を妨げるものを取り除く 2:1
 - b. 成長を促すものを取り入れる 2:2-3

B. 神の民であることから生まれてくる立場 2:4-10

1. 新しい霊的家への所属 2:4-5
2. 尊い礎石の所持 2:6-8
3. 神の民への変貌 2:9-10

IV. 救いのゆえにあるべき生涯 2:11-3:12

A. 未信者の前での生き方 2:11-3:7

1. 地上での生き方の勧め 2:11-12
2. 政府に対する従順 2:13-17
3. 主人に対する従順 2:18-25
 - a. しもべの責任 2:18
 - b. 神に喜ばれる従順に基づく苦しみ 2:19-20
 - c. キリストの模範 2:21-25
4. 家族に対する従順 3:1-7
 - a. 妻の従順 3:1-6
 - b. 夫の責任 3:7

B. 信者の前での生き方 3:8-12

1. 正しい生き方 3:8-9
2. 聖書に基づく根拠 3:10-12

V. 救いによってもたらされる苦難との向き合い方 3:13-5:11

A. 苦しみの価値 3:13-17

B. 義のために苦しんだキリストの模範 3:18-22

C. 義のための苦しみの対処方法 4:1-11

1. 現在の苦しみに打ち勝つ方法 4:1-6
 - a. ふさわしい武具を身に着ける 4:1-2
 - b. 正しい動機を保つ 4:3-6
2. 未来の祝福に基づく方法 4:7-11
 - a. 終わりに関する宣言 4:7a
 - b. 終わりを見据えた生き方 4:7b-11a
 - (1) 互いに愛し合う生き方 4:7a-9
 - (2) 互いに仕え合う生き方 4:10-11a
 - c. 終わりに達成される目的 4:11b

D. 苦しみに必要な不動の忍耐 4:12-19

1. 苦しみの目的に基づく喜びが忍耐を生み出す 4:12-14
2. 苦しみの原因が忍耐を生み出す 4:15-16
3. 神の裁きの現実が忍耐を生み出す 4:17-19

VI. 救われている者たちへの勧め 5:1-11

- A. 長老たちへの勧め 5:1-4
- B. すべての教会員への勧め 5:5-9
- C. すべての信徒のための祈り 5:10-11

VII. 結びの挨拶 5:12-14

- A. 手紙に関する説明 5:12
- B. 挨拶 5:13-14a
- C. 頌栄 5:14b

ペテロの手紙第二

ペテロの遺言

I. 緒論

A. タイトル

この手紙は著者であるペテロの名前がタイトルに付けられています。

B. 著者

新約聖書の中でもっともその聖典性を疑われてきたのがこの手紙です。そのもっとも大きな根拠は2世紀までの教父たちがこの手紙からの引用を全く行っていないということです。これには、大きく4つの理由を考えることができます。それらは、この手紙がペテロの生涯の最後に書かれたこと、短い手紙であること、当時起こっていた迫害のゆえに手紙が多くの地域で閲覧されにくかったこと、そしてペテロの名前を語った偽文書が多く出回っていたため、引用することが困難になっていったという背景があったということです。しかし、使徒ペテロがこの手紙を書いたことを立証するいくつかの証拠があります。

1. 外的証拠

- a. ユダがこの手紙を引用している（ユダ17-18 cf. II ペテロ3:1-3）
- b. エウセビウスが、アレキサンドリアのクレメントの聖書にはこの手紙があり、彼が注解書を書いたことを記している（2世紀中頃）
- c. オリゲヌスが3世紀にこの手紙が聖書の一部であることを認め引用している
- d. ペテロの黙示録（2世紀中頃）にこの手紙の引用がある

2. 内的証明

- a. 二つの手紙の類似点
- b. 使徒の働きに記録されているペテロのメッセージとこの手紙の類似点
- c. キリストとの個人的関わり（1:13-18）
- d. 2通目の手紙であることの宣言（3:1）
- e. 偽造者による手紙とは考えにくい内容

C. 読者

この手紙には特定の読者の名前が記されていませんが、「この第二の手紙をあなたがたに書き送るのは・・・」（3:1）という言葉は、この手紙が第一の手紙と同じ読者に宛てて書かれたものであることを示唆しています。

D. 執筆年代と執筆場所

ペテロが殉教するのが68年頃なので、この手紙がそれ以降に書かれた可能性はありません。また第一の手紙が64年頃書かれているので、それ以前に書かれていることも考えられません。時間的な詳細や場所の詳細が記されていないこの手紙ですが、一般的に考えられているのは、ペテロがローマの獄中から、殉教する少し前にこの手紙を書いたという説です。これが正しければ、執筆年代は65-67年頃と考えることができます。

E. 背景と目的

異端の教えが教会の中に横行していることがペテロの耳に入り、危惧感を強めたペテロは問題を解決するためにこの警告の手紙を書き記しました。無律法主義、不品行、不遜、不従順などの問題に対して厳しい警告と戒めの言葉を用いて、ペテロは教会を守ろうとしています。

F. 特徴

1. ペテロの遺言として書かれている
2. 「知識」と「知る」という言葉に重点が置かれている

II. 内容

I. 挨拶 1:1-2

II. 救いを知る 1:3-11

- A. 神の力によって保たれる救い 1:3-4
- B. キリスト者の美德によって得る確信 1:5-7
- C. 豊かな報いによって与えられる報酬 1:8-11

III. みことばを知る 1:12-21

- A. 使徒の証言による確信 1:12-18

- B. 聖霊の働きによる靈感 1:19-21

IV. 敵を知る 2:1-22

- A. 偽教師の登場とその性質 2:1-3

- B. 偽教師の罰に関する保障 2:4-9
 - 1. 天使たちの例 2:4

 - 2. 旧世界の例 2:5

 - 3. ソドムとゴモラの例 2:6-8

 - 4. 主の保障 2:9

- C. 偽教師の特徴 2:10-22
 - 1. 彼らの特徴と行動 2:10-17

 - 2. 彼らの影響 2:18-19

 - 3. 彼らの悲劇的な状況 2:20-22

V. 預言を知る 3:1-18

- A. みことばを信頼することへの勧め 3:1-2

B. キリストの再臨の否定 3:3-7

C. キリストの再臨の確かさ 3:8-13

1. 遅延の理由 3:8-9

2. この世に関するキリストの再臨の結果 3:10-12

3. クリスマンに関するキリストの再臨の結果3:13

D. 再臨を視野に入れた最後の励まし 3:14-18

1. 聖さへの励まし 3:14

2. みことばを信頼することへの励まし 3:15-16

3. 偽教師たちに注意することへの励まし 3:17

4. 成長への励まし 3:18